

令和元年度第2回高梁市総合教育会議 会議録

1. 招 集 令和2年3月18日 午後3時00分
2. 開 会 令和2年3月18日 午後3時00分
3. 閉 会 令和2年3月18日 午後4時30分
4. 会議の場所 高梁市役所 3階大会議室2・3
5. 出席、欠席した構成員の氏名

氏 名	出欠の別
近 藤 隆 則	出 席
小 田 幸 伸	出 席
川 上 は る 江	出 席
吉 川 昭	出 席
渡 邊 あ り さ	欠 席
藤 井 祥 生	出 席

6. 会議に出席した者の職氏名

職 名	氏 名	備 考
政 策 監	前 野 洋 行	
健 康 福 祉 部 長	宮 本 健 二	
秘 書 広 報 課 長	川 内 野 徳 夫	
こ ど も 未 来 課 長	赤 木 憲 章	
教 育 次 長	竹 並 信 二	
参 与	田 村 啓 介	
教 育 総 務 課 長	大 福 克 志	
学 校 教 育 課 長	石 原 洋 重	
社 会 教 育 課 長	渡 辺 丈 夫	
ス ポ ー ツ 振 興 課 長	藤 井 正 宣	
文 化 セ ン タ ー 所 長 代 理	原 田 貴 子	
教 育 総 務 課 総 務 係 長	村 上 靖 恵	

## 7. 協議題

- (1) ICT教育について ～GIGAスクール構想～
- (2) 令和2年度予算について【教育委員会関係分】

## 8. 議事の概要

- 1 開会
- 2 あいさつ（市長）

先般、新年度予算案を発表した。教育関係でも様々な事業に取り組む予定であるが、大きな事業としては、児童・生徒への1人1台タブレット端末の整備がある。これは国の方針に基づく事業でもあるが、国の経費負担は3分の2である。残りの3分の1の経費は市費負担となるが、計画的に進めていく。併せて、先生の事務負担軽減を目的とした校務支援ソフトを学校に導入する。これまでできるだけ軽減を図っていかうとの考えで、例えばスクールサポーターの配置といった取り組みも行ってきたが、今回のソフト導入もその一環である。

子どもが減少していく状況にはあるが、1クラスに多ければ30数人が在籍しており、これで果たして、子どもたちに十分に目が行き届くのか。就学前教育も合わせ、教育環境のさらなる充実を図っていくうえで、こうした点についても、今後考えていく必要があるのではないかとも思っている。

移住・定住を考える人にとって大切なのが、居・職・住と医療と言われる。生活するうえで、大人たちは働かなければならないし、子どもたちは学ばなければならない。そのための環境づくりにどのように取り組んでいくのが移住・定住者の増加に向けての課題であるという意見も伺っている。

来年度は、令和3年度からの次期総合計画の策定に向けての作業を進めていく。一番大きな方針の部分はこれから定めていくが、その方針に向けて教育分野ではどう取り組むのがよいのかといったことについて、教育委員の皆さんを交え、しっかりと考えていかなければならないと思っている。

また、2040年の人口目標に掲げた2万5千人の達成には、強い意志を持って取り組みを進めていくが、その中で高梁市に暮らす人々の生活の質を上げていくことも大切ではないかと考えている。教育に限らず、様々な分野での取り組みによって、多くの皆さんに住みやすいと思ってもらえるようなまちをつくっていききたい。

新年度予算に関連して、県の重要文化財である旧吹屋小学校の保存修理工事を2年後の完成に向けて進めているところであるが、小学校周辺を含めた吹屋地区の活性化を今後どう図っていくのか、外部コンサルタントの力も借りながらコンセプトプランを作成するための予算を計上している。吉岡銅山も国の史跡指定に向けた調査・研究を進めているが、その先も考えていかなければならないと思う。

ヒルクライムは、来年度が10回目の大会である。4月から、岡山県警は2人乗りのタンデム自転車の公道走行を解禁する。この解禁によって、視覚や聴覚に障害のある人もタンデム自転車の後ろに乗って、外の風を感じながら走ってもらうことが可能となる。ヒルクライムでも、レースは難しいかもしれないが、エキシビションか何らかでタンデム自転車の活用ができればと思っている。

国際交流では、トロイ市の中学生受け入れの年となっており、準備は進める予定であるが、コロナウイルスの影響で来日が難しいかもしれない。なお、5月のトロイ市への訪問団派遣は中止とした。秋にはフランスのアンペール高校へ市内の高校生を派遣する計画であるが、こちらも世界の情勢を見ながら派遣の可否を判断しなければならない。

災害復旧のみならず、災害からの復興、また復興計画に関連した様々な事業を盛り込んだ。教育委員の皆さんには、教育分野に限らず、様々な面からご助言・ご指導をいただきたい。

### 3 協議題

教育総務課長・学校教育課長	別紙資料により「(1) ICT教育について ～GIGAスクール構想～」を説明。
藤井教育委員	予算の関係もあり、タブレット端末の導入になるのだと思うが、キーボードがない状態ではできることがかなり限定される。1年目は仕方ないとしても、長期的には見直しも必要ではないだろうか。
教育総務課長	タブレット端末については、キーボード付きでの整備を予定している。3種類のOSから選定作業を進めているが、いずれになってもキーボードを付ける考えである。
教育長	今回のGIGAスクール構想を受けて、各メーカーとも比較的安価で機能的な機器の開発を進めていると聞いている。
吉川教育委員	タブレット端末は令和5年度までに計画的に整備を進めるということであるが、来年度の整備時期の見込みはどうか。
教育総務課長	導入するOSなどの決定は、新年度になって、現場の先生たちとも協議してからになると思われる。夏過ぎには整備したいとは考えているが、はっきりとした時期はまだ決まっていない。
吉川教育委員	デジタル教科書の導入教科の候補は何か。また、校簿の電子化については、どういったものから進める考えであるのか。
学校教育課長	デジタル教科書については、小学校では1～6年生で国語、算数、5・6年生で英語が候補となっている。校簿の電子化は、まずは学校日誌や出席簿から行い、可能であれば保健関係も進めていきたいと考えている
川上教育委員	デジタル教科書を国語、算数、英語に絞った理由は何か。例えば、理科では宇宙や地球の分野が教えるににくいということで、これまででも映像資料をパソコンに取り込んで使っている例がたくさんある。こうしたものにデジタル教科書を活用すれば効果的であると思うし、実際に理科分野での活用は進んでいる。
学校教育課長	各学校への調査の結果、希望の多かった教科とした。理科を希望する学校もあったが、これはEテレの活用で当面はカバーできるとの意見もあり、まずは国語、算数、英語の3教科とした。また、今はまだ電子黒板の整備が十分進んでいないため、一挙にデジタル教科書を導入しても活用しきれない状況もある。
教育長	現在、デジタル黒板は学校の各階に1台ずつ整備されているが、各教室への整備を進めていく予定である。電子黒板の整備と並行して、デジタル教科書も拡充していくことを考えている。
教育総務課長	電子黒板については、学校の液晶テレビを活用した対応も考えている。
川上教育委員	今回のGIGAスクール構想に限ったことではないが、何か教育政策を立てて運用していく際に、メンバーが主体的に年間計画を立て、自分たちでPDCAサイクルを動かしていけるような組織をつくらないと上手くいかない。教育委員会が関わっていく部分、学校の主体性に任せる部分、そのバランスを考えてきたものとなるよう取り組んでほしい。
学校教育課長	ご意見を踏まえ、しっかりと対応していきたい。
藤井教育委員	Google for Educationは、無料で提供されており、活用範

<p>市長 学校教育課長 市長</p>	<p>困もとても幅広い。学校がそれぞれの状況に合わせ、必要な内容を選んで活用することもできて有効であると思うので、参考としてほしい。</p> <p>校務支援ソフトの導入はいつの予定か。</p> <p>2学期を予定している。</p> <p>来年度は、学校のICTが一気に進む。子どもたちはすぐに慣れてくれるだろうが、教える側の大人たちもしっかりと準備を進めておく必要がある。</p>
<p>教育長</p>	<p>文部科学省は、文房具のような感覚でタブレットを子どもたちが使えるようになることを目的としている。小さいころからICTを使用できる環境を整えること、また自ら課題を見つけて考え主体的に取り組んでいくこと、この2つがセットになれば、子どもたちもSociety 5.0に対応できるという考えである。</p>
<p>教育総務課長</p>	<p>別紙資料により「(2) 令和2年度予算について【教育委員会関係分】」を説明</p>
<p>藤井教育委員 学校教育課長</p>	<p>校務支援ソフトの詳細を教えてください。</p> <p>通知表や指導要録といった成績処理を簡単に行うことができるようになる。この他、児童・生徒の出席を記録する校簿が5種類あり、現在は担当がそれぞれに記入しているが、1人が入力すれば全ての校簿に反映できるようになる。また、学校内でしか共有できていなかったプリントやワークシートといったデータを、市内全ての学校で共有し授業に生かしていくこともできる。不登校対策としては、指導内容を記録し、出席状況も教育委員会側からの確認ができるので、これまで以上に連携した素早い対応が可能となる。小学校から中学校への接続においては、データで引き継ぐことができるようになる。</p>
<p>吉川教育委員</p>	<p>ヒルクライムが10回目を迎えるということで、毎年春から秋にかけて、多くのサイクリストが吹屋へ登ってきており、大きな成果ではないかと感じている。一方で課題もあるということであるが、どういった点が課題と考えているのか。</p>
<p>スポーツ振興課長</p>	<p>もともと5年の開催予定であったものが、10年まで延長となっている。多くの市民ボランティアや応援体制で成り立つ大会は、約9割を占める市外からの参加者からは大変好評をいただいている。しかし、運営経費が1,300万円程度かかっており、市の補助金400万円ありき、また延べ600人を超えるボランティアで支えられている大会をこのままの形で継続できるのか。経済効果についても、約1,500万円と数字上の試算はできるが、市民の実感が伴っているのかどうかを測る術がない。こうした点も踏まえて、市民の満足度、参加者の満足度を改めて検証しながら、どのような形であれば大会を続けていくことができるのか、実行委員会における再協議をお願いしたいと考えている。</p>
<p>市長</p>	<p>廃止という選択肢はないと思っているが、今後も継続していくための見直しは必要と考える。現在、自転車を活用したまちづくりを推進する全国市区町村長の会に、設立時から参加して活動している。昨年9月には、職員による交流・連携のまちづくりプロジェクトチームを立ち上げ、自転車を一つのキーワードとして、どのような活性化の取り組みができるか検討を進めているところでもある。その取り組みの一環として、ヒルクライムのレースがあるという位置付けができればと思っている。</p>
<p>吉川教育委員</p>	<p>旧吹屋小学校の保存修理工事の完成が2年後となっているが、完成後の活性化</p>

参与	<p>策を考えていくには、これからの1年がとても重要だと考えている。様々な取り組みの中で、今期待しているのが、先般申請された日本遺産への認定である。申請に当たって、ベンガラの色を「ジャパンレッド」と表したと聞き、とても素晴らしい表現だと思ったのであるが、その辺りの経緯を教えてほしい。</p> <p>1月下旬に申請を行い、文化庁にも受理された。今回で日本遺産の募集がいったん中止されることから、ラストチャンスでの挑戦となり、結果は5月ごろ発表される予定である。担当者会議や現地調査の中で、文化財を切り口とした高梁市の魅力として、まずイメージされるのが、備中松山城と吹屋の二つであった。城については、現存天守12城をはじめとして全国には多くの城があり、また城下町を切り口とする場合にも、江戸時代には300を超える藩が存在していたことから、希少性のアピール力が弱い。精査する中で、最後に残ったのが吹屋のベンガラと銅で、銅は「あかがね」の別名もある。その赤のイメージが強く残るのが吹屋の町並みであり、それを創出した産業である点に着目して提案内容をまとめることとし、職員で考え出したのが「ジャパンレッド」という造語である。明治時代、日本の殖産興業政策の中で、欧米には多くの赤絵が施された漆器や陶磁器がもたらされたことにより、日本のイメージカラーとして「赤」が定着したものと考える。それらの赤には吹屋で生産されたベンガラが大きく寄与しており、「ジャパンレッド」の源流をたどれば吹屋に行き着くとして提案したものである。日本遺産として認定され、吹屋のさらなる活性化につながればと願っているところである。</p>
川上教育委員	<p>高梁運動公園整備事業は、公園部分を駐車場とするという内容であったか。再度確認したい。</p>
スポーツ振興課長	<p>公園敷地の遊具を全て撤去して更地とし、駐車場スペースとして整備する。現在の所管課の都市整備課では、今後の遊具更新や公園として維持管理する計画がないため、駐車スペース不足解消を目的として、今回、スポーツ振興課で過疎債を財源として予算措置したものである。</p>
川上教育委員	<p>遊具を有する子どもが遊べるような公園は、周辺にはあの場所しかなかったはずである。公園と駐車場の用途は全く異なる。市長は子どもも住みやすいまちにしたいと話されており、そうした中でも公園という要素は大きいと思う。子どもが少なくなってきたとはいえ、都市整備課は市全体の公園の配置状況等も勘察し、十分に検討したうえで廃止を決めたのだろうか。</p>
市長	<p>高梁運動公園全体を整備する中での条件の一つとして、遊具公園が整備された経緯があったと思うが、徐々に遊具が壊れていく中で利用も減っていた。立地的な利便性等も考慮して、全体の都市計画の中で、子どもたちが安心して楽しめる場についても検討したいとは考えている。</p>
藤井教育委員	<p>市内にも吉備路やしまなみ海道のサイクリングロードのような場所を作れば、毎週末に人が集まるようになり、それに伴う経済効果も期待できる。ヒルクライムのような年1回の大会では、出店もボランティアとなるので収益につながらない。歩行者天国のように自転車が安心して走ることができる場所を定期的に設けることで、出店やイベントが企画しやすいと思う。沿道に花や緑を育てるといった環境整備も行っていけば、それを楽しみに訪れる人も増えるのではないか。</p>
市長	<p>現在、おもてなしの環境整備の気運が醸成されつつあるのが、ヒルクライムの</p>

<p>スポーツ振興課長</p>	<p>スタート地点の高倉地域であると思う。スタート地点の花壇や沿道の手入れを地域で行われている。また、ヒルクライムコースの宇治町の沿道にも、桜並木と季節の花で彩られている場所がある。</p> <p>遠原のフラワーロードであるが、町内ごとに沿道をエリア分けし、季節のフラワーポットを植えて手入れされている。その取り組みが評価され、建設大臣賞も受賞された。</p>
<p>市長</p>	<p>市街地にも環境省のバイクビズのコースが設定されているが、看板も小さく、認知度は今一つである。ご意見も参考に、取り組みを考えていきたい。</p>

#### 4 その他

<p>市長</p>	<p>新年度で考えていることを少しお話ししたい。</p> <p>会議の冒頭でも次期総合計画の策定について述べたが、これから定める柱の第一に「人づくり」を置くことは、これまでと変わらない。その次に、移住・定住が重要であるので、職があり、医療があり、教育があるということを中心に施策を進めていきたい。教育委員の皆さんからも参考となる事例があればご教示いただきたい。</p> <p>4月から玉川幼稚園、宇治幼稚園を休園とする判断をした。今は学校再編推進審議会の答申内容に基づき進めることとしているが、子どもが少なくなってきた現実がある中で、いずれは学校の再編も避けては通れない。非常に大きな課題である。</p>
<p>教育長</p> <p>市長</p>	<p>福地小学校の小規模特認校の取り組みは、来年度の状況はどうなったのか。</p> <p>学区外から3人の就学が予定されており、一定の効果があつたといえる。</p> <p>次期総合計画の中に、学区の再編、学校の特色づくりといった内容も盛り込めればとの思いはある。</p> <p>現在、公共交通の見直しを行っている。年間約2億6,000万円をスクールバスも含めた公共交通の維持経費に支出しているが、全て一般財源であり、非常に厳しい状況である。スクールバスを廃止することはできないが、学区を見直すことで今よりも効率的な運行が可能となると思っており、最終的には地域の公共交通も一体的に考えたいと思っている。学区の見直しは、いずれ教育委員の皆さんに議論をお願いしなければならないので、ご承知おきいただきたい。</p>
<p>教育長</p>	<p>次回の総合教育会議は1学期中の開催を予定しており、そのころには次期総合計画の骨子もお示しできると思う。</p> <p>教育大綱、次期教育振興基本計画についても、来年度、策定作業を進める。しかしながら、これらの基本となるのは総合計画であるので、その策定状況を踏まえ、並行して教育大綱、教育振興基本計画の改訂を進めていきたい。</p>
<p>藤井教育委員</p>	<p>抽象的な表現でなく、高梁市として教育水準を高めるということを明確に表してほしい。</p>
<p>川上教育委員</p>	<p>2040年の人口目標2万5千人については、外国人の移住・定住も意識されているのと思っている。現在、高梁市は居住外国人の比率が県内一となっている。技能実習生の増加も背景にあるが、吉備国際大学の留学生には、他の地域での技能実習終了後に、もう少し日本で学びたいと進学してきた学生も多い。いずれは母国へ帰ることを考えている外国人も多いが、中には住みやすいとそのまま高梁</p>

<p>市長</p> <p>川上教育委員</p>	<p>に残ってくれる人もいるので、移住・定住施策を進めるうえでチャンスであるともいえる。多文化共生の時代に、高梁市としてよい発信ができれば、他地域で暮らす外国人にも口コミで広がっていくのではないだろうか。</p> <p>そのためにも、多文化共生事業の充実は必要であると思っている。現在、市内には26カ国の外国人が暮らしており、言葉の壁もいくらかあるかもしれないが、何らか市民との交流を図っていくことができればと思っている。</p> <p>2040年に向けて、長期的スパンで施策を検討してほしい。</p>
-------------------------	---

## 5 閉会

### あいさつ（市長）

本日は、いろいろなご意見をいただき感謝する。

先ほど教育長からも説明があったとおり、令和2年度は教育大綱を見直す。基本目標の「大志を抱き未来を拓く人づくり」を変える必要はないのではないかとも思うが、一度立ち止まって見直すことは必要なことである。

今は10年先どころか、5年先も容易には見通せない時代となっているが、「人づくり」は10年先、20年先を見据えて考えていかなければならない。目まぐるしく変わっていく時代を、子どもたちは生きていく。時代の変化に合わせて、まちづくりにも新たな取り組みが必要であると感じている。

教育委員の皆さんにも、引き続きいろいろとお知恵をお借りできればと思っているので、今後ともよろしく願います。